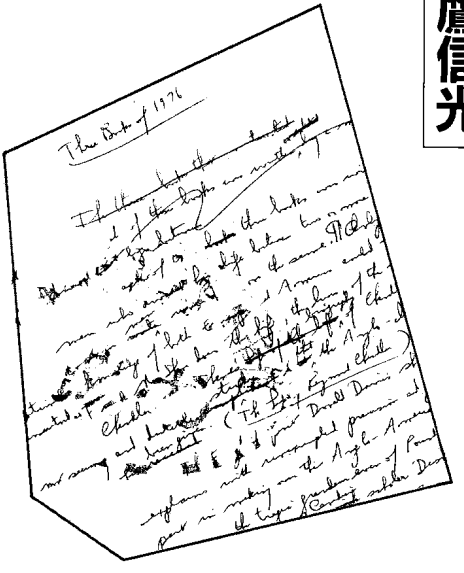
サム・スペードに乾杯

小鷹信光

東京書籍

サム・スペードに乾杯

小鷹信光



小鷹信光(こだかのぶみつ)
翻訳「悪党バーカー/人狩り」(スターク)「一瞬の敵」(R・マクドナルド)
「郵便配達夫はいつも二度ベルを鳴らす」(ケイン)「酔いどれの詩り」(クラムリー)
「ダシール・ハメットの生涯」(ジョンスン)以上早川書房
「マルタの鷹」「ブラッド・マネー」(ハメット)河出書房新社
「過去ある女」(チャンドラー)サンケイ文庫　他多数
評論・エッセイ「パパイラスの舟」早川書房「ハードボイルド以前」草思社
「マイ・ミステリー」読売新聞社「ハードボイルド・アメリカ」河出書房新社
「アメリカ語を愛した男たち」研究社出版「翻訳という仕事」プレジデント社
「ブラック・マスクの世界」(編著)国書刊行会　他多数

サム・スペードに乾杯
1988年5月17日第一刷発行
定価1300円
著者 小鷹信光
発行者 小高民雄
発行所 東京書籍株式会社
東京都台東区台東 1-5-18
942-4111(営業)942-4173(編集)
印刷製本 図書印刷株式会社
© Nobumitsu Kodaka 1988, Printed in Japan
ISBN4-487-75204-3

TOKYO SHOSEKI PRESENTS.

サム・スペードに乾杯　目次

サンフランシスコからの二通の手紙

翻訳者の喜怒哀楽　9
幻の『ブラック・マスク』創刊号　13
サム・スペードは殺されていなかった！　16
ウエストコースト日記　19
あとの祭りではすまされない　30
アンケートをパスした日　33
セックスのあとはだれだって　36
ミステリーのタイトルについてひとつふたつ　39
クレイグ・ライスのふたつの顔　45
出口のないトンネル　48

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつまでも受け手ではいられない　53
スタンリー・エリンの心の虫　56
クライム・フィクションの新しい書き手たち　59
師走のミステリー　62
『ブラック・マスクの世界』始末記　66
「白い拳」事件　70
いくら精をだしても　73
もうバテバテ！　76
サンフランシスコからの二通の手紙　79
ミステリー作家の氏素姓　83
ロス・マクドナルドをさがして　86
『タイム』のハードボイルド　90
ハメットと私　99

ブラックマスク・ワンダーランド　115

私立探偵小説の系譜——九人のハードボイルド作家

1　ジョン・エヴァンス　173
2　ウェイド・ミラー　178
3　トマス・B・デューイ　184
4　エド・レイシイ　190

5　マイケル・ブレット　201
6　エリオット・ウェスト　210
7　アンドリュー・バーグマン　214
8　アーサー・ライアンズ　220
9　ロス・マクドナルド　228

あとがき　248

初出一覧　251

装画　小島 武
装丁　スタジオ・ギヴ

サンフランシスコからの二通の手紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

翻訳者の喜怒哀楽

㊐

私のような目立ちたがり屋の翻訳者は例外中の例外として、プロに徹すれば徹するほど翻訳者は〈黒子〉に近づいていく。学者先生の翻訳とはちがって、プロの翻訳者は己れの限界をよくわきまえている。いかなる名作、古典、文学賞ものの作品を訳そうと、それをものしたのは原作者であり、自分は黒子としてヨコのものをタテに直したにすぎない、と身のほどをわきまえているのである。偉いのは原作者だということをちゃんと知っているのだ。

というのは、まあタテマエであって、私なども、何人もの先人たちの旧訳がでまわっている名作、古典の類いを、「ぜひ新訳でお願いしたい」と頼まれると正直いってうれしくなる。一九八五年の暮には、チャンドラーの翻訳の仕事がまわってきた。新雑誌の目玉商品として一挙掲載したいのでチャンドラーの未訳シナリオ（『プレイバック』の原型）を訳してほしいというのだ。このときの編集者の口説き文句はまさに感動的だった。

「チャンドラーの霊が小鷹サンに訳してほしいといっています！」

結局私は、暮と正月の休みを返上して、ペラ七百枚を約束どおり正味二十日間でやっつけるハメになった。そして、四百字一枚五千円という破格の原稿料は、三月の中旬、下の娘の大学の入

学金にあらかたもっていかれてしまった。

「チャンドラーの霊」は大げさだが、情け深い霊であったことは確からしい。

しかしなんといっても翻訳者の「喜」は、どんな小さなことでもいいから、自分の訳文について一言褒められたときだろう。こんなことはめったにないのでほんとうにうれしい。黒子にも五分の魂なのだ。だれも褒めてくれないのなら、そのうち翻訳者だけが集まって内輪褒め大会でも開催しよう。

怒

これに対して心ある翻訳者が歯ぎしりして口惜しがり、地団駄踏んで怒り狂うのは、「ただし、翻訳はいただけない」「生硬で、原文のニュアンスをつたえていない」「日本語がこなれていない」などなど、一言のもとに切りすてられたときだ。この種の寸評は、たいてい書評の末尾にとってつけたようにくっついている。千枚を超す作品（最近はこの程度はザラなので、単価計算がますます不利になってきた）を営々と半年がかりで訳し終え、あげくのはてに「いただけない」の一言で片づけられたのでは、あまりといえばあまりである。刺しちがえて死んでしまいたくなる心ある翻訳者も多いにちがいない。原文を一行たりとも読みもしないくせに、なにが「原文のニュアンスをつたえていない」だ！　死んじまえ、この野郎！

ついでに書いておくが、さほどの出来とも思えない翻訳本を、名訳だ、労訳だと、わけ知り顔にもちあげるのも腹が立つ。ほんとの「名訳」なんてものは、百年に一つあるかないかなのだよ。

もうひとつ些細なことだけど、編集者や校正者が生半可な知識や思いこみで勝手にカタカナ表記を直してしまうのも困りものだ。トレイがトイレになったり、ロープがロープになったり、ボ

ガートがボガードになったり、エンタテインメントがエンタティメントになったり。カンベンしてよ、ほんとに。

哀

てなわけで、出来あがってしまった本をパラパラめくっているときに、ミスや誤植を発見したときほど哀しいことはない。それが、プロの翻訳者の沽券にかかわるようなケアレス・ミスである場合はなおのことだ。

哀しい笑い話ではすまされない。私自身も「右」を「左」と訳してしまったり、「親」(親米派)を「反」とうっかり訳してしまい、そのまま活字になってしまった経験がある。こういう本にかぎって再版にならず、いつまでも恥をさらしつづけることになる。読物だから辛うじて許されるのだろうが、もしこれが工学書や技術書だったら一大事だ。

翻訳者稼業の哀しさといえば、私が筆頭にあげたいのは、翻訳というのが先のたのしみをはじめから奪われている仕事だということだ。だから、亡くなった小泉喜美子さんのように、あたえられた作品をしまいまで読まずにかまわず頭から訳していくという変種もときどき出現する。だが大方の翻訳者は、読み通してから仕事にとりかかる。先がわかっている話を、賃仕事のサービス業とわりきって、コツコツと進めていかなければならない。文字を書く、日本語をつくりだすという作業に従事しながら、ときとして途方もない哀しさにおそわれるのはこのためだろう。私には、たとえばこのような雑文を書きとばすというはけ口があるが(これがなかったらとっくに発狂している)、翻訳業に徹したプロたちはあくまでも黒子の身に甘んじようとする。だが、「自分の文章を書くのはめんどうだ」「翻訳一本のほうがずっとラクだ」という弁明も、私にはとても哀

しくきこえる。

楽

私も翻訳者のはしくれだから、翻訳作業そのものに無限の楽しみが秘められていることも知っている。その作業には、奇妙にマゾヒスティックな快感もある。

二百ページ、三百ページの本にとりかかった当座は、気の遠くなるような気分におそわれる。賽の河原か、針のむしろか。やっと半分を超えても、うっとうしさは持続する。それだけに、あと数ページというところまでさしかかったときの快感はたとえようがない。終わってしまえば虚脱感があるだけだが、射精寸前のあの快感が何ともたまらないのだ。

ただし、この快感を少しでも長びかせようとすると、私のような遅漏、いや遅訳者になってしまう。

ありきたりの話だが、八方手をつくして調べまわった小さな不明箇所が、ひょんなことからひょいとわかったときの楽しさもまた格別だ。困りものなのは、得てしてそういうことが、訳書刊行後に発生することである。

これまたいわずもがなのことだが、初版五、六千部とあきらめていた作品が、なんのはずみか一カ月後に再版になったりすると、これはもう手放しでよろこんでしまう。思わぬ不労所得がころがりこんだような楽しい気分になってしまうのだ。翻訳者バカとは、私(おれ)のことか。

幻の『ブラック・マスク』創刊号

このところ〈『ブラック・マスク』の世界〉に首までどっぷり浸かっている。先祖がえりもいいところだ。ハードボイルドを中心点にした私の同心円は、一九二〇年代の初期あたりを目下のところぐるぐるまわりつづけているのだ。たとえばいま目の前にあるのは、あの The Black Mask の創刊号、一九二〇年四月号の目次である。

雑誌『ブラック・マスク』の正真正銘かけねなしのトップ・バッターとなったのはJ・フレデリック・ソーンの Who and Why?（誰が、なぜ？）という謎解きミステリーだった。このソーンという書き手は創刊号から一九二二年三月号まで『ブラック・マスク』に連載もの二編をふくむ七編の作品を発表している。二番バッターはハロルド・ウォードで、The Stolen Soul（盗まれた魂）という短いオカルト物。この作家はウォード・スターリングという別名も用いて一九二三年の四月号まで常連作家として活躍し、連載ものをふくめると総登場回数は第一位のE・S・ガードナー、第二位のラウール・ホイットフィールドについで同誌の歴代第三位に食いこんでいる多作家である。シリーズ・キャラクターは持たなかったが、秘密諜報員や刑事コンビものなどを得意とした。

この二人も同じことなのだが、創刊号に顔を並べているほかの十人のライターは、ただ一人の

例外（ヴィンセント・スターリット）をのぞいて、いまではまったく忘れ去られてしまったパルプ雑誌ライターばかりである。

創刊三年めの一九二二年、ダシール・ハメットがピーター・コリンスン名義の「帰路」で『ブラック・マスク』にデビューした十二月号の目次を見てみると、様子が少し変わっている。ハメットより一足先にデビューしたキャロル・ジョン・デイリイがジョン・D・キャロル名義の作品とあわせて二篇を発表し、探偵マクガーク・シリーズで売り出したレイ・カミングスというライターの処女作や、フレデリック・C・デイヴィスの短篇も顔を並べている。デイヴィスはやがてパルプを卒業し、骨太の長篇ミステリーを書くようになった。

ハメットがはじめて本名で『ブラック・マスク』に登場したのは一九二三年十月十五日号だった。この号にはハメット名義でコンチネンタル・オプ物語の第二作を発表し、コリンスン名義でもう一篇書いている。オプのデビューはコリンスン名義で前号の十月一日号に発表した「放火罪および……」だから、コリンスンとハメットが同一作家であることは最初から読者にはあきらかにされていたわけだ。十月十五日号には、ハメットが編集部に寄せた手紙も掲載されている。

その十年後、レイモンド・チャンドラーが「ゆすり屋は撃たない」でデビューした一九三三年十二月号には、ほかにどんな作家が書いているのだろう。目次を見ると、新人チャンドラーが巻頭を飾り、ついでガードナーの怪盗エド・ジェンキンスもの（全部で七十三編あり、『ブラック・マスク』最多出場を誇るシリーズ・キャラクター）、ラウール・ホイットフィールドのハリウッド・ミステリーがつづいている。トリを務めているトム・カリーも当時の常連作家の一人。この号の収録作品数はわずか六篇にすぎないが豪華執筆陣といえるだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com